

## 『イリアス』の運動競技に関する研究

～英雄の特性を中心として～

## Study on the Athletics of “Iliad”

～Form the Viewpoint of Hero's Characteristics～

小林 日出至郎

Hideshiro KOBAYASHI

## 1. はじめに

紀元前5世紀はじめ、古代ギリシア人は、当時、広大な土地を支配し世界最強と言われていた帝国ペルシアとの戦争に勝利し、都市国家の自主独立を守り、西洋古典文化を創造した人々である。ホメロスの叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』はこのような人間形成に多大な影響を与えた西洋最初の文学作品である。川島は、ペルシア戦争を「オリエントの専制支配に対する市民共同体の抵抗」として理解し、「ホメロスの叙事詩は、まさにこの新しい市民共同体の最初の自己表現」であると<sup>1)</sup>評価している。またプラトンの『国家』（606E）では「この詩人こそがギリシアを教育してきた」と明記されている。

ホメロス作品は古典文化に関する基本的認識のために不可欠であるが、スポーツ文化や体育の本質的解明においても人類的価値がある。特に『イリアス』第23歌<sup>2)</sup>においては、運動競技 *ἀεθλος*<sup>3)</sup> について約650行に亘り詳述され、この行数は叙事詩全体24歌分の1歌分に相当する表現<sup>4)</sup>である。ここでは、生命の安全を尊重する運動競技、フェア・プレー、人間を超越する存在（神々）と人間との関係等に関連する記述が明示されている。これらの観点は現代スポーツや体育の本質解明において重要な示唆をもたらす可能性がある。運動競技は、命の安全を保障する競技者同士の合意がなければ成立しない。これは戦争における闘争的運動場面における人間の意志とは決定的に異なる。戦場では生死を懸けた闘争が展開される。また、それとの関連で、運動競技場面の闘争では、命を危険にさらす行為、不正な行為が否定される。運動競技では正しい行為が尊重されている。そして、勝者は人間を超越する存在（神々）に支援される英雄である。以上のような観点は、時代と地域を越える運動競技の本質解明のための課題となる可能性がある。

運動競技における命の安全保障とこれを尊重する行為、これらは運動競技を成立させる本質的契機である。しかし、運動競技場面において、人間を超越する存在（神々）の関与により英雄が勝者になるというメッセージは何を意味しているのか。競技種目において英雄の体力・技能が優れていても、気持ち、用具、場等の状況が不利になれば、本来、勝者になるはずの英雄でも、勝利を得ることはできないことが、第23歌の運動競技場面において語られている。『イリアス』における勝利する英雄は神々の関与がある。現代のスポーツ競技場面でも、大会前の優勝候補選手が、大会本番において、適切な集中力、巧みな用具操作、場の活用等により優勝する場合があるが、このような勝利の原因を我々は直ちに、人間を超越する存在にあると思うことは希である。運動競技への神々の関与やこれによる人間の勝利という『イリアス』の内容は、ホメロスの時代に限定される特殊なこととして探究され、現代のスポーツ文化の本質解明には繋がることはないであろう

うか。しかし、現代オリンピックや世界大会等で活躍するスポーツ選手の体験記には、日常とは異なる不思議な運動体験が綴られ、このような体験に関して、選手たちは人間を超える存在からの授かりものとして捉える場合もある。もし、このような内容に関連することがホメロスにより『イリアス』において言語化されているならば、運動競技場面における神々の影響という研究課題はスポーツの本質探究に繋がる可能性がある。

## 2. 先行研究の検討と本研究の目的

『イリアス』の運動競技に関する研究として、岸野雄三とR.ハルダーの研究がある。岸野の研究は、古典期祭典競技との比較から、またR.ハルダーは、競技スポーツの本質という観点から、第23歌における運動競技の特性を明らかにしている。岸野の研究は1) 即興的、英雄が中心の競技会、2) 「勝者には高価な商品が与えられ、オリュンピア競技祭のように名誉を象徴するような勝冠競技会ではなかった」3) 常設の競技場がない、4) 用具は固定されず、色々である、5) 裸体の競技会ではない、6) 古典期の祭典競技には行われない槍の格闘や弓射競技がある、以上のことを<sup>5)</sup>明示している。これに対し、R.ハルダーは、現代的スポーツ競技の観点から次の6つの特性を指摘している。1) 生命の安全、2) 試合の規則とその尊重、3) 競技者と競技主催者がいること、4) 勝者への褒美、5) 試合後の栄誉、6) 観衆がいること、以上である<sup>6)</sup>。しかし、彼らの研究では、『イリアス』の主要な視点、神々の影響や英雄の特性という観点から運動競技に関する論考が展開されてはいない。

運動競技における神々の影響という観点からホメロス作品を論考する研究として小林の研究<sup>7)</sup>がある。この研究では、運動競技に参加した英雄たちが、体力や技能的実力よりも神々の関与によって勝敗が決定されたことが<sup>8)</sup>論述されている。しかし、『イリアス』第23歌で語られる英雄たちが、何故、神々によって支援されたのか、この課題は明確にされてはいない。この課題を明確するためには、英雄の技能的観点を含めた他の特性を探究する必要がある。英雄の特性によって、神々の影響を受けると推察されるからである。

『イリアス』第23歌の運動競技に参加する英雄の特性に関する研究として、E.N.ガーディナー『ギリシアの運動競技』<sup>9)</sup>がある。彼は、ホメロスにおける英雄の特性として競技的精神について論述し、この精神が戦士的精神に基づくことを指摘し、戦場へ向かう息子グラウコスへの父の言葉を引用する。「常に衆に抜きんでて最高の手柄をたてよ、不名誉なことはするなという訓辞<sup>10)</sup>である。この精神こそ、英雄たちが重視した精神であり、運動競技においてもこの精神が語られ、「常に第一人者であり、他のすべての人よりも優れていたいという願望や、苦しみに耐え抜く喜び」が尊重されていたことをE.N.ガーディナーは論述する<sup>11)</sup>。しかし、彼の研究における英雄の特性、競技的精神は、第23歌の競技種目に参加した英雄たちの誰もが有している気質であり、優勝した英雄に対して何故、神々は関与したのか、この課題を解明してはいない。この解明には、優勝した英雄の特性について探究する必要がある。

そこで、本研究の目的は、『イリアス』における英雄の特性を再認識し、第23歌の運動競技に参加した英雄たちの特性を検討・明確化することにより、神々の影響により勝者となった英雄たちはどのような特性があるのか、これを明かにすることである。

なお、テキスト<sup>12)</sup>はHomerus (rev. by Monro and Allen TW) “Homeri Opera” (2vols, Oxford UP, OCT)を用い、邦訳は松平千秋『イリアス』(岩波文庫)と呉茂一訳『イリアス』(岩波文庫)を参考とし、訳の引用には松平『イリアス』を用いる<sup>13)</sup>。

## 3. 『イリアス』における英雄の特性

### 1) 戦士としての英雄

『イリアス』における英雄たちは、戦場における勝利が要求されている。ヘクトル、パトロクロス、アキレウス、ディオメデス、オデュッセウス等の英雄たちは、戦場における「名誉」(τιμή, κῆδος, κλέος)の獲得を目指すべき運命におかれた人間たちである。彼らは「恥」(αἰδώς, ἔλεγχος)を受けるよりも「名誉」のために死を選ぶことを倫理規範としている。戦士としての「名誉」は、戦場にお

ける活躍により高められ、活躍の状況に応じて戦利品や多くの財産が配分されている。しかし、戦場にける部族の指導者である英雄の敗北は、自己の死に限定されるだけでなく、部族の崩壊、家族の奴隷化、領土の放棄等の人間的悲劇をもたらすことになる。

ギリシア方の総大将アガメムノンが、戦況においてトロイア方に攻撃され、ギリシア側が窮地に陥った時、英雄アキレウスとの和解のための資産は次のようなものが語られている。直ちに用意できる資産として「火にかけておらぬ三脚釜を七つ」「黄金十タラントン」「頑健な馬十二頭」「優れた手芸の心得のあるレスポス生れの女七人」等が示されている<sup>14)</sup>。また、トロイア方に勝利した場合には、「黄金製、青銅製の品々」をアキレウスの船に満載すること、「ヘレネに次ぐほどの、トロイエの美女二十人」の選定と獲得、帰還後のアガメムノンの娘との結婚、年貢の多い豊かな七つの町の提供が提案されている<sup>15)</sup>。以上の資産は、ギリシア方における最強の英雄アキレウスの「名誉」の高さを示している。

しかし、英雄アキレウスは、彼の領土へ帰還する運命にはないのである。彼はギリシア方の勝利に貢献する決定的戦力ではあったが、矢に討たれて戦死する運命にある。英雄が戦死することの意味はトロイア方第一の勇将ヘクトルとその妻アンドロマケの会話に象徴されている。戦死の運命にある英雄ヘクトルは、彼の妻にとって、「頼もしい夫」であり、父であり、母であり、兄である。アンドロマケは、アキレウスにより生まれた町を破壊され、王であった父が殺され、7人の兄弟は殺され、母である王妃と共に奴隷にされ、その後、母は死に、孤児になったが、ヘクトルに生かされるという経歴をもっている。戦場にもどろうとする夫の手をとり、彼女は泣きながら以下のように語っている。

δαιμόνιε, φθίσει σε τὸ σὸν μένος, οὐδ' ἐλεαίρεις  
παῖδά τε νηπίαχον καὶ ἔμ' ἄμμορον, ἢ τάχα χήρη  
σεῦ ἔσομαι· τάχα γάρ σε κατακτανέουσιν Ἀχαιοὶ  
πάντες ἐφορμηθέντες· ἐμοὶ δέ κε κέρδιον εἶη  
σεῦ ἀφαρματούση χθόνα δύμεναι· οὐ γὰρ ἔτ' ἄλλη  
ἔσται θαλπωρή, ἐπεὶ ἂν σύ γε πότμον ἐπίσπης,  
ἀλλ' ἄχε'· οὐδέ μοι ἔστι πατήρ καὶ πότνια μήτηρ. 16)

「あなたはひどい方、その勇気があなたの命取りになるかも知れぬというのに、幼い坊やのことも、やがてあなたに先立たれて独り身になる不運なわたしのことも憐れんでは下さらぬ。間もなくアカイア軍が一斉に押し寄せて来て、あなたのお命を奪うでしょうに。万一あなたを失うことになったら、わたしにはもうなんの楽しみもありません、残るのは悲しみばかり。・・・」<sup>17)</sup>これに答えてヘクトルは語る。

ἦ καὶ ἐμοὶ τάδε πάντα μέλει, γύναι· ἀλλὰ μάλ' αἰνῶς  
αἰδέομαι Τρῶας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλους,  
αἶ κε κακὸς ὧς νόσφιω ἀλυσκάζω πολέμοιο·  
οὐδέ με θυμὸς ἄνωγεν, ἐπεὶ μάθον ἔμμεναι ἐσθλὸς  
αἰεὶ καὶ πρότοισι μετὰ Τρώεσσι μάχεσθαι, 18)

「妻よ、今そなたがいったことは、みなわたしも考えてはいる。しかしな、もしわたしが臆病者よろしく、戦場から離れて尻込みするようなことになったら、トロイエの男たちにも、裳裾曳く女たちにも顔向けがで

きぬと、心から思っているのだ。・・・」<sup>19)</sup> 英雄ヘクトルはアンドロマケの夫であるが、トロイア方の運命を担っている英雄である。彼の参戦は部族の自立と運命に結びついているのである。

川島は以上のような英雄たちの状況を以下のようにまとめている。

「彼らは不老不死の神々とは違って人間は死すべき存在である、人の生は悲惨を免れることはできないという人間理解を持っていました。それだからこそ誉れを切望せざるを得なかったのです。この恥と名誉の倫理は、アキレウスとかヘクトルといった個々人の運命観に裏打ちされていたとはいえ、古代ギリシアの社会、特にホメーロスの描く社会においては、単なる精神的な価値であるとか、まして個人の内面的価値といったものではなくて、明確に社会的な価値だったのです。」<sup>20)</sup>

『イリアス』の英雄たちは、戦場において常に死を覚悟しつつ、「名誉」の獲得を使命としている。

## 2) 英雄への神々の関与

英雄たちの戦場における活躍と死は、神々の関与によっている。

ギリシア方がトロイアへ遠征してきた理由の一つは、ギリシア方の総大将アガメムノンの弟メネラオスの妃ヘレネが、トロイアへとアレクサンドロス（パリス）よって奪われたことによる。第3歌では、メネラオスとアレクサンドロスの決闘が語られている。この決闘は、トロイア方総大将ヘクトルによって提言される。ギリシア軍とトロイア軍が対峙する中、彼は、弟アレクサンドロスの意志を伝える。

αὐτὸν δ' ἐν μέσσω καὶ ἀρητίφιλον Μενέλαον  
οἴους ἀμφ' Ἑλένη καὶ κτήμασι πᾶσι μάχεσθαι.  
ὄπποτερος δέ κε νικήσῃ κρείσσων τε γένηται,  
κτήμαθ' ἐλὼν εὖ πάντα γυναικᾶ τε οἴκαδ' ἀγέσθω·  
οἱ δ' ἄλλοι φιλότῃ καὶ ὄρκια πιστὰ τάμωμεν. 21)

「アレスの寵児メネラオスとふたりだけで、ヘレネならびに全財産を賭けて一騎打ちの勝負をしたいといっている。相手を負かして勝者となった者が、全財産と女を獲て引き上げればよい。あとは我ら両軍が、誓約して和平の取り決めをしよう、というのだ。」<sup>22)</sup>

これに応じてメネラオスが発言する。

κέκλυτε νῦν καὶ ἐμεῖο· μάλιστα γὰρ ἄλγος ἰκάνει  
θυμὸν ἐμόν, φρονέω δὲ διακριθήμεναι ἤδη  
'Αργείους καὶ Τρῶας, ἐπεὶ κακὰ πολλὰ πέπασθε  
εἴνεκ' ἐμῆς ἔριδος καὶ Ἀλεξάνδρου ἔνεκ' ἀρχῆς·  
ἡμέων δ' ὄπποτέρω θάνατος καὶ μοῖρα τέτυκται,  
τεθναίη· ἄλλοι δὲ διακριθεῖτε τάχιστα. 23)

「今度はわたしのいうところも聞いてくれ。実際わたしが一番辛いのだ。アレクサンドロスが仕掛けたことから起った、わたしと彼との争いのために、アカイア勢もトロイエ方も既にさんざん苦難を蒙ってきた現在、もはや一刻も早く引き分けてもらいたいと思っている。われら二人のうち、既に運命の定まった方が死ねばよいのだ。われら以外の諸君の方は即刻引き分けてもらいたい。」<sup>24)</sup>

そのような二人の宣言を受けた総大将アガメムノンとヘクトルは、ゼウス神、陽の神、河の神等に生贄を

捧げ、誓約「ἀμφ' Ἐλέυη καὶ κτήμασι πᾶσι μάχεσθαί」ヘレネならびに全財産を賭けて一騎打ちの勝負」の証人に神々がなっただけのように祈りの儀式<sup>25)</sup>を行い、決闘場を設定する。メネラオスとアレクサンドロスは決闘を開始し、槍、太刀、組討の死闘を続け、アレクサンドロスが命を落とす寸前に、女神アプロディテが現れ、アレクサンドロスを救出する<sup>26)</sup>。両者の勝敗は決定的であったが、神ゼウスの意志により、トロイア方が誓約を破り、両軍の戦争が開始されることになる。

死闘時における女神のアレクサンドロス救出およびその後のゼウス神の意志による戦争開始は、英雄に対する神々の関与という観点において、『イリアス』の象徴的な出来事である。命を落とさず英雄はアプロディテに助けられ、また、誓約により多くの死者を伴う残酷な戦争を避けようとした両総大将の意志は、ゼウス神によって否定されたのである。藤縄はこのような神々について次のように述べている。「『イリアス』を読んで、誰でも最も戸惑うのは、神々が人間界の事件を操っていることであろう。しかも、これらの神々は、まるで人間のように、考え、感じ、行動するのである。」<sup>27)</sup>『イリアス』における英雄たちは、人間のような感情を持つ不死なる神々に左右されつつ、自らの運命を生きるという特性がある。

### 3) 定められた運命を生きる英雄

『イリアス』に語られる英雄たちは、他部族との戦いを避けることが困難な時代に生きた人間たちである。英雄たちは「名誉」を切望し、「恥」に繋がる行動を否定している。アキレウスに討たれ死ぬ運命にあったトロイア総大将ヘクトルはこのような生き方の典型である。彼は家族のため、トロイアのため、ギリシア側の英雄を多数殺し、女神テティスを母とするアキレウスと決闘し、討たれることになる。英雄ヘクトルの運命は、神々の意志により定まっていたのである。また、ギリシア軍最強の英雄アキレウスも母である女神テティスから死の運命を聞かされ、自覚しつつトロイアの戦場を生き延びている。

ヘクトルはアキレウスに討たれ<sup>28)</sup>、アキレウスは彼の遺体を自分の陣屋へ運びこむ。その後、神々の配慮<sup>29)</sup>により、ゼウスの命を受けた女神テティスは息子アキレウスにヘクトルの遺体を返すよう説得し、彼は納得する<sup>30)</sup>。一方、虹の女神イリスは、ヘクトルの父である老王プリアモスにゼウスの意図を伝え、彼は一人でアキレウスの陣屋へ赴き、途中、人助けの神ヘルメイアスに支援されながら、息子ヘクトルの遺体を引き取りに行くことになる<sup>31)</sup>。そして、総大将であったわが子を殺された敵将アキレウスの眼前に、老王プリアモスは立ち、「εἶρωτο ἄστυ καὶ ἀτύτους 町と民とを守ってくれた倅」「ἀμυνόμενον περὶ πατρός 祖国を救おうと戦っていた」ヘクトルの遺体返還を願っている<sup>32)</sup>。プリアモスの言葉にアキレウスは心打たれ、自分の父や親友パトロクロスのことを偲びつつ、また、老王も共に涙を流した。地獄の苦しみを体験した二人は、人間としての互いの不幸を共感することにより、憎しみと怒りから解放されることになる。戦場における死を覚悟する英雄アキレウスは、敵陣の息子殺しの戦士の前へ一人で来たプリアモスに敬意を表しつつ、次のように語っている。

ἀλλ' ἄγε δὴ κατ' ἄρ' ἔξεν ἐπὶ θρόνου, ἄλγεα δ' ἔμπης  
 ἐν θυμῷ κατακείσθαι ἔασομεν ἀχνύμενοί περ·  
 οὐ γάρ τις πρῆξις πέλεται κρυεροῖο γόοιο·  
 ὡς γὰρ ἐπεκλώσαντο θεοὶ δειλοῖσι βροτοῖσι,  
 ζῶειν ἀχνυμένοι· αὐτοὶ δέ τ' ἀκηδέες εἰσί.  
 δοιοὶ γάρ τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὐδὲι  
 δῶρων οἶα δίδωσι κακῶν, ἕτερος δὲ ἑάων·  
 ᾧ μὲν κ' ἀμμείξας δῶη Ζεὺς τερπικέραννος,  
 ἄλλοτε μὲν τε κακῷ ὃ γε κύρεται, ἄλλοτε δ' ἐσθλῷ·

「まあ椅子にお掛けになるがよい。苦しいことごとは、辛いことではあるが、胸の内にそっと寝かせておきましょう。心を凍らす悲しみに暮れたとて、どうにもなるものではない。そのように神々は哀れな人間どもに、苦しみつつ生きるように運命の糸を紡がれたのだ——御自身にはなんの憂いもなくせに。ゼウスの屋敷の床には、人間に賜るものを容れた甕が二つおいてあり、一つには悪いことが、もう一つには善いことが入っている。雷電を楽しむゼウスから、この二つを混ぜて賜った者は、ある時は不幸に遭うが、幸せに恵まれることもある。」<sup>34)</sup> 『イリアス』の英雄たちは、戦場において、神々により生死が決定され、そのような苦しみを生きる運命にある。彼らの生は、運命により、哀れにも「ζώεεν ἀχρὺν μένοντες 苦しみつつ生きるような」人生である。しかし、プリアモス、アキレウス、ヘクトル等の英雄たちは、このような悲惨さや苦しみに耐えつつ、人間を地獄へと導く怒りや憎しみから解放され、人間らしい時空を生きている。ここに英雄たちの特性がある。

#### 4. 運動競技と第23歌の英雄たち

##### 1) 『イリアス』における運動競技と第23歌の英雄たち

『イリアス』における運動競技は、生死を懸けた英雄たちの競争ではなく、R.ハルダーが指摘しているように生命の安全を本質としている。この運動は、戦場における身体的競技とは異なる。英雄同士の命懸けの戦争、メネラオスとアレクサンドロス（パリス）、アイアスとヘクトル、アキレウスとヘクトル等の一騎打ち、またギリシア軍とトロイア軍の死力を尽くした命を破壊する戦いとは異なり、運動競技は人間の命の安全が前提である。このような運動競技に関して、ホメロスは男性名詞の *ἀεθλος* を使用している。小林は、『イリアス』における *ἀεθλος* 出自箇所に関して下記のようにまとめている。<sup>35)</sup>

『イリアス』において *ἀεθλος* は「競技」「闘い」「苦勞」「苦難」「試練」等と訳される。A.Gehring “Index Homericus” (New York, 1970)、呉茂一訳『イーリアス』及び松平千秋訳『イリアス』を参考としながら、出自箇所を整理すると以下ようになる。

- 1) *ἀεθλος* が「競技」と訳される場合
  - 第9歌—124行・266行
  - 第16歌—590行
  - 第23歌—631行・646行・707行・753行・831行
- 2) *ἀεθλος* が「試練」「苦難」「難業」と訳される場合
  - 第3歌—126行
  - 第8歌—363行
  - 第19歌—133行

以上の調査に基づき、さらに小林は *ἀεθλος* の用例を分析・検討し、第23歌で語られる運動競技に関する行数の割合を『イリアス』全体と比較し、以下のように論述している。

15000行以上に及ぶ『イーリアス』は、第1歌から第24歌に分けられる。この叙事詩の中で、*ἀεθλος* は11箇所で使用されている。

第9歌—124行・266行において、*ἀεθλος* は、「競技」に勝った馬という表現で使用され、第16歌—590行では、戦場における相手との距離を説明する比喩、すなわち、槍投げ「競技」として用いられている。これら3箇所で見られる *ἀεθλος* は1行程である。また、「試練」「苦難」「難業」という意味で訳される *ἀεθλος* も、これらと同様である。第3歌—126行における *ἀεθλος* は、布地に表現された英雄たちの試練や苦難として使用され、第8歌—363行と第19歌—133行においては、ヘラクレスの難業として用いられている。

以上の用例に対し、『イーリアス』第23書における *ἀεθλος* は5箇所で使用され、この書の主題となっている。この書の *ἀεθλος* は、約900行に及ぶ第23書の中で650行に亘り詳述され、叙事詩全体の中で集約的に表現されている。この行数は、叙事詩全体を24書として考えた場合、1章分（625行）に相当することになる。

以上のように、『イリアス』の運動競技は第23歌において詳細に語られている。従って、「英雄の特性」をパースペクティブとする本研究では、第23歌の運動競技に参加した英雄たちを中心として研究を進めることとする。

第23歌の運動競技は、英雄アキレウスが、親友パトロクロスの戦死を弔うために挙行した運動競技であり、①戦車競技②拳闘③角力④競走⑤槍の格闘⑥銃鉄投げ⑦弓競技⑧槍投げの8種目が実施され、これらの種目にギリシア側の英雄たちが参加している。戦車競技には5人の英雄が参加する。馬術に勝れたエウメロス、剛勇ディオメデス、ギリシア方総統アガメムノンの弟メネラオス、老将ネストルの優れた息子アンティロコス、クレテ勢の勇士メリオネスにより競技が行われ、競技後、競技主催者アキレウスにより、勝者に対して牝馬や黄金等の褒美が与えられる。拳闘では2人の英雄エペイオスとエウリュアロスが、角力でも2人の英雄テラモンの子大アイアスとオデュッセウスが、競走では3人の英雄オイレウスの息子アイアス・オデュッセウス・アンティロコスが、槍の格闘では大アイアスとディオメデスが、銃鉄投げでは4人の英雄ポリュポイテス・レオンテウス・大アイアス・エペイオスが、弓競技ではテウクロスとメリオネスの2人の英雄が、槍投げではアガメムノンとメリオネスがそれぞれの種目に参加している。

## 2) 第23歌の運動競技における英雄の技能的特性

第23歌に参加する英雄は、人間を代表する戦技を身につけた英雄たちである。彼らは、戦場における戦車や槍の術、組討ち、石投げ、弓術、走力等において優れた技能を有している。これらの技能は、戦場において彼らの命を守り、敵の命を奪い、かれらの誉れを高めることに繋がるからである。『イリアス』に登場する英雄たちは、戦争を避けることができない時代に生まれた人間であり、戦闘術を身につけていることが、部族、家族、友人等を守り、彼らの部族社会の繁栄に繋がっているのである。第23歌の8種目の運動競技はすべて戦技の試合である。

8種目の運動競技に関するそれぞれの行数は、戦車競技；389行、拳闘；49行、角力；40行、競走；58行、槍の格闘；28行、銃鉄投げ；24行、弓競技；34行、槍投；14行である。戦車競技に関する行数は、他の7種目に比較すると圧倒的に多い行数である。戦車競技は第23歌の運動競技を代表する種目である。

戦車競技において、結果的に優勝した英雄はディオメデスである。藤縄が次に指摘するように、この英雄は、戦車競技に熟達していた可能性がある。「・・・『イリアス』において、戦車は乗り物としては、かなり重要であった。戦車を最も有効に利用していたのは、明らかにアルゴスの若い王ディオメデスである。彼の御者は僚友ステネロスであるが、一時は女神アテネが代わって御者を勤め、その時には車上から槍で戦って、軍神アレスを撃退したことになっている（第五卷八三七—八六七）」<sup>36)</sup>

しかし、彼の馬術に関する力量はエウメロスに劣っていた。戦車種目に参加した5人の英雄の中では、英雄エウメロスについて「ὄς ἰπποσυνῆ ἐκέκαστο 馬術に秀でた男」であったことが<sup>37)</sup>また、戦車競技が開始され、彼が最後のコースを走り出した時、1位であったことが明言されている<sup>38)</sup>。この状況をホメロスは「τότε δὲ ἀπετήγε ἐκάστου φαίνετ' 各御者の伎倆がはっきりとあらわれ」<sup>39)</sup>と評価している。これはエウメロスが5人の中で最も馬術に優れていることを彼が認めている証拠である。もちろん、戦車競技においては、馬の力量を忘れてはならない。彼の馬は次のように語られている。

Ἴπποι μὲν μέγ' ἄρισται ἔσαν Φηρητιάδαο,  
τὰς Εὐμηλος ἔλαυνε ποδώκεας ὄρνιθας ὡς,  
ὄτριχας οἰέτεας, σταφύλη ἐπὶ νῶτον εἴσας·  
τὰς ἐν Πηρείῃ θρέψ' ἀργυρότοξος Ἀπόλλων,  
ἄμφω θηλείας, φόβον Ἄρηος φορεύσας.

「馬の中ではペレスの子（アドメトス）の持ち馬で、その子エウメロスの駆る二頭が特に優れ、脚の速さは飛鳥の如く、毛色も年齢も同じく、ともにその背は水平に伸びて（高低はなく）、測ったが如く同じ丈であった。銀の弓持つアポロンがペレイエで手ずから育てた逸物で、いずれも牝馬、敵の戦意を挫くに足る駿馬であった。」<sup>41)</sup> ディオメデスが操るトロス馬も、ゼウスの影響を受ける名馬<sup>42)</sup>である。もし、彼がエウメロスよりも馬術に優れているならば、アポロンよりも上位神ゼウスの影響を受けた馬どもを走らすディオメデスこそが、最終コースの始めにおいて1位でなければならない。以上の考察によれば、馬術に関する力量では5人の中で、エウメロスがもっとも優れていると判断される。

### 3) 第23歌の運動競技における英雄の神的特性

最終コースにおいて、ディオメデスの戦車はエウメロスのそれに接近しつつ、今にも追い越そうとする勢いがあった<sup>43)</sup>。ここにアポロン神が関与し、ディオメデスの手から、馬を駆る鞭を落とさせることになる<sup>44)</sup>。しかし、これに直ちに気づいたアテネ女神は彼に鞭をもどさせ、エウメロスの戦車に関与し、この戦車は壊れ、彼は地面に転げ落ちることになる。このような経過を詩人ホメロスは次のように表現している。

αὐδ' ἄρ' Ἀθηναίην ἐλεφηράμενος λάθ' Ἀπόλλων  
 Τυδείδην, μάλα δ' ὤκα μετέσσυτο ποιμένα λαῶν,  
 δῶκε δέ οἱ μάστιγα, μένος δ' ἵπποισιν ἐνήκεν·  
 ἦ δὲ μετ' Ἀδμήτου υἱὸν κοτέουσα βεβήκει,  
 ἵππειον δέ οἱ ἦξε θεὰ ζυγόν· αἰ δέ οἱ ἵπποι  
 ἀμφὶς ὁδοῦ δραμέτην, ῥυμὸς δ' ἐπὶ γαῖαν ἐλύσθη.  
 αὐτὸς δ' ἐκ δίφροιο παρὰ τροχὸν ἐξεκυλίσθη,

45)

「だが、アポロンがテュデウスの子をたばかったことに、アテネが気づかぬ筈はなく、たちまち軍勢の牧舎者に駆け寄ると、鞭を手渡し、馬に力を吹き込んだ。怒った女神はさらに、アドメトスの子に追いつがると、馬の軛を砕き、馬は道の両側に分かれて走り、轆は地面に転がった。車上の人も御者台からもんどり打って車輪の脇に転げ落ち、」<sup>45)</sup> 戦車競技の結果は、エウメロスが5位に、ディオメデスが勝利を獲得することになる。

第23歌の種目において神々が登場する種目は、戦車競技以外に競走と弓射競技である。競走において、駿足のアイアス、智恵あるオデュッセウス、若い英雄たちの中では最も脚の速いアンティロコスが試合に参加している。試合の最終コースに差し掛かった時、オデュッセウスは心の中で女神アテネに祈っている。「κλῦθι, θεά, ἀγαθή μοι ἐπίρροτος ἐλθέ ποδοῖεν. お聞き下さい、女神よ、どうか私の脚に、力強い神助を賜りますように。」<sup>47)</sup> この競技においても、アテネが競技者オデュッセウスの手足と競技場に関与し、オデュッセウスが優勝する。さらに、弓射競技では、メリオネスとテウクロスの二人が参加する。戦場における両者は弓を用いても活躍する英雄であるが、特にテウクロスはギリシア軍の「ῥοιστοσ Ἀχαιῶν τοξοσύνη 第一の弓の名手」と言われ<sup>48)</sup>、戦場での彼の活躍を神々の王ゼウスが称賛している<sup>49)</sup>。しかし、神に祈らぬテウクロスは敗れ、アポロン神に祈るメリオネスが見事に勝利を得ている。

### 5. 運動競技における神的影響を受ける英雄の可能的特性

第23歌の運動競技において、神的影響を受け、勝利を授かった英雄たちはディオメデス、オデュッセウス、メリオネスである。英雄としての彼らの特性は、以下のように捉えることが可能である。

戦車競技において女神アテネにより、勝利を授かった英雄ディオメデスは、総大将アガメノンとヘクト

ルによる戦争中止の誓約締結と、神々の関与による誓約破棄後の戦場において、彼の可能的特性が語られている。ディオメデスは、アテネ軍を激励するアガメムノンの姿を見ながら次のように語っている。

τούτῳ μὲν γὰρ κῦδος ἄμ' ἔψεται, εἴ κεν Ἀχαιοὶ  
 Τρῶας δηρώσωσιν ἔλωσί τε Ἴλιον ἱρήν,  
 τούτῳ δ' αὖ μέγα πένθος Ἀχαιῶν δηρωθέντων.  
 ἀλλ' ἄγε δὴ καὶ νῶϊ μεδώμεθα θούριδος ἀλκῆς.

50)

「アカイア方がトロイエ勢を打ち破り、イリオスの聖都を陥れた暁には、榮譽がこの方の上に輝くであろうが、万一アカイア軍が破れた場合には、耐えがたい悲嘆に見舞われるのもこの方なのだ。」<sup>51)</sup> この彼の言葉には、総大将ヘクトルの可能的英雄の特性が感得される。それは戦場において「常に死を覚悟しつつ、『名誉』の獲得を使命としている」英雄の精神性<sup>52)</sup>である。このような精神を尊重する彼は、戦場で女神アテネより不屈の闘志を受けつつ<sup>53)</sup>、神々と人間の違いを見分ける力を授かり<sup>54)</sup>、多くのトロイア勇士を討つことになる。

競走において女神アテネに祈ったオデュッセウスの英雄の可能的特性は、トロイア方優勢時における偵察に向かうディオメデスの言葉に表現されている。

“ εἰ μὲν δὴ ἔταρόν γε κελεύετε μ' αὐτὸν ἐλέσθαι,  
 πῶς ἂν ἔπειτ' Ὀδυσῆος ἐγὼ θείοιο λαθοίμην,  
 οὐδ' ἔπειτα μὲν πρόφρων κραδίη καὶ θυμὸς ἀγῆνωρ  
 ἐν πάντεσσι πόνοισι, φιλεῖ δέ ἐ Παλλὰς Ἀθήνη.  
 τούτου γ' ἐσπομένοιο καὶ ἐκ πυρὸς αἰθομένοιο  
 ἄμφω νοστήσαιμεν, ἐπεὶ περιόιδε νοῆσαι.”

55)

「同行する仲間を、わたしが自分で選べということであるなら、わたしとしては神の如きオデュッセウスをどうして忘れることができよう。彼こそは、どのような難しい仕事においても、誰よりも進んでことに当たる気概と意地を忘れぬ男であるし、パラス・アテネのお気に入りでもある。彼が同行してくれれば、われらは炎々たる猛火の中からも、揃って無事に戻ってこられると思う。人並みすぐれて才覚の働く男だからな。」<sup>56)</sup> ここには、英雄オデュッセウスの優れた知性と気性が語られている。

弓射競技でアポロン神に祈ったメリオネスの英雄の可能的特性は戦場における武勇である。トロイア軍が編隊を組みギリシア側に攻勢を仕掛ける中、クレテの王イドメネウスは戦場における臆病者について次のように述べている。

τοῦ μὲν γάρ τε κακοῦ τρέπεται χρῶς ἄλλυδις ἄλλη,  
οὐδέ οἱ ἀτρέμας ἦσθαι ἐρητύετ' ἐν φρεσὶ θυμός,  
ἀλλὰ μετοκλάζει καὶ ἐπ' ἀμφοτέρους πόδας ἴζει,  
ἐν δέ τέ οἱ κραδίη μεγάλη στέρνοισι πατάσσει  
κῆρας ὀιομένω, πάταγος δέ τε γίγνεται ὀδόντων·

57)

「卑怯者の顔色は青くなったり赤くなったり絶えず変わり、気持も落ち着かず、じっと座っていることができぬ、しゃがんでいても絶えずもぞもぞと足を変えし、死の恐怖に心の臓は胸の内で波打ち、齒はがたがたと鳴る。」<sup>58)</sup> これに対し、戦場の武勇を以下のように彼は理解し、メリオネスの武勇について語っている。

τοῦ δ' ἀγαθοῦ οὐτ' ἄρ τρέπεται χρῶς οὔτε τι λίην  
ταρβεῖ, ἐπειδὴν πρῶτον ἐσίζηται λόχου ἀνδρῶν,  
ἀράται δὲ τάχιστα μιγήμεναι ἐν δαῖ λυγρῇ·  
οὐδέ κεν ἔνθα τεόν γε μένος καὶ χεῖρας ὄνοιτο.

59)

「反して勇者は、一たび伏勢の中に身を置けば、顔色も変わらずさして恐れることもなく、一刻も早く血みどろの戦いに加わりたいと願うものだ。そのような事態に際しても、そなたの力と腕とは人からとやかくいわれることはあるまい。」<sup>60)</sup> 戦場における彼は恐怖心に陥ることなく、自分の成すべきことを実践できた英雄である。

第23歌において神と関わり勝利した英雄ディオメデスは戦士の特性、オデュッセウスは優れた知性、メリオネスは武勇という可能的特性に優れた人物たちとして『イリアス』において語られている。

## 6. 結論と今後の課題

以上の論考は以下のようにまとめることができる。

『イリアス』における英雄の特性は、戦場における戦いにより「名誉」が高まり、「名誉」のために「恥」よりも死を選ぶという戦士の特性、戦場における英雄の生死は神々の作用によるという特性、定められた運命を主体的に生きる特性である。

また、第23歌の運動競技に参加する英雄たちは、戦場における技能を競う特性、場合により勝者は神々の影響を受けるという神的特性がある。

そして、その競技で神的影響を授かった英雄は、戦士の特性、困難・苦難を克服する豊かな知性、如何なる場合も死を恐れない武勇という可能的特性において、他の英雄たちよりも優れている面がある。

本研究の今後の課題は、8種目中、神々の影響を受けなかった勝者はどのような特性があるのかを調査・検討することである。

<付記：本研究は、平成17～20年度文部科学省科学研究費「現代社会におけるスポーツの諸問題と多面的価値に関する研究」（研究代表者：佐藤臣彦）の研究成果の一部である。>

## 注

- 1) 川島重成『「イリアス」ギリシア英雄叙事詩の世界』岩波, 1991, 18頁
- 2) 「歌」は書物において通常, 「章」として表現される。本研究では, 呉茂一訳『イリアス』においては「書」として表現されているが, 松平千秋訳『イリアス』(岩波, 1996)の表現を用いる。
- 3) 本研究における *ἀεθλος* は, 呉や松平の訳書(上書)では「競技」として表現されているが, 第23歌において *ἀεθλος* は明らかに運動文化を表現しているので, 「競技」という訳ではなく, 「運動競技」として訳する。
- 4) 小林日出至郎「『イリアス』における運動競技の特性に関する研究」新潟体育学研究, 第25巻, 2008, 10頁
- 5) 岸野雄三「ギリシャ・ローマの体育」『現代体育・スポーツ体系第2巻』講談社, 1983, 19頁
- 6) R.ハルダー(松本仁助訳)「ギリシアの文化」北斗出版, 1995, 204~207頁
- 7) Hideshirou, K. “Study on the Significance of Homer and Plato in Modern Sport” Comparative Studies in Religious Thought, Vol.7, 2007
- 8) Ibid. pp.88~89
- 9) 岸野雄三訳, プレスギムナスチカ, 1981; Gardiner, E.N. “GREEK ATHLETIC SPORTS AND FESTIVALS” London, 1910
- 10) ホメロス(松平千秋訳)『イリアス』(岩波, 1996; 以下『イリアス』と略す) VI 208
- 11) 前掲書9), 21~22
- 12) 前掲『イリアス』成立に関する研究は, 松本二助の立場; 「統一論」「口誦詩論」の折衷の立場をとるが, 詳しい論考は今後の課題とする。松本の研究『ギリシア叙事詩の誕生』(世界思想社, 1989)によれば, ホメロス作品成立に関する研究は18~19世紀において数多く行われ, 以下の3つの立場にまとめられる。「統一論」; 一人の作者が中心部を最初に作り, その後, 他の作者が改作したという立場(同書, 6~9頁), 「分析論」; 「すでに存在していた多くの短い叙事詩をうまくつなぎあわせてつくった」(同書, 7頁), 「口誦詩論」; トロイア戦争を叙事詩として, 記憶・創作・伝承した物語が文字として書き留められたと考える立場。
- 13) 松平千秋の訳が岩波版としては新しいためである。
- 14) 『イリアス』IX 122~135
- 15) 『イリアス』IX 135~157
- 16) Homeri Opera I ; VI 407~413
- 17) 『イリアス』VI 407~413
- 18) Homeri Opera I ; VI 441~443
- 19) 『イリアス』VI 441~443
- 20) 前掲書1), 47頁
- 21) Homeri Opera I ; III 90~94
- 22) 『イリアス』III 90~94
- 23) Homeri Opera I ; III 97~102
- 24) 『イリアス』III 97~102
- 25) 『イリアス』III 302~309
- 26) 『イリアス』III 340~394
- 27) 藤縄謙三『ホメロスの世界』新潮選書, 1996, 127頁
- 28) 『イリアス』X X II 188~374
- 29) 『イリアス』X X IV 22~76
- 30) 『イリアス』X X IV 77~142
- 31) 『イリアス』X X IV 143~467

- 32) 『イリアス』 X X IV468～506
- 33) Homeri Opera II ; X X IV522～530
- 34) 『イリアス』 X X IV522～530
- 35) 本研究の『イリアス』における *ἀεθλος* 出自箇所及び用例に関する研究は、前掲書4)の研究による。
- 36) 前掲書22) 117頁
- 37) 『イリアス』 X X III289
- 38) 『イリアス』 X X III376
- 39) 『イリアス』 X X III374～375 ; 呉は「その時こそ、各自の馬の優劣が見え」と訳しており、松平の訳とは異なる。本研究では、戦車競技が馬の良さを引き出す技能により勝因が決定することを配慮し、意味解釈より、松平の訳を引用する。
- 40) Homeri Opera I ; II763～767
- 41) 『イリアス』 II763～767
- 42) 『イリアス』 V260～273
- 43) 『イリアス』 X X III376～382
- 44) 『イリアス』 X X III383～384
- 45) Homeri Opera II ; X X III388～394
- 46) 『イリアス』 X X III388～394
- 47) 『イリアス』 X X III770
- 48) 『イリアス』 X III314
- 49) 『イリアス』 VIII273～291
- 50) Homeri Opera I ; IV415～417
- 51) 『イリアス』 IV415～417
- 52) 本研究3-1) 「戦士としての英雄」参照
- 53) 『イリアス』 V124～126
- 54) 『イリアス』 V127～130
- 55) Homeri Opera I ; X242～247
- 56) 『イリアス』 X242～247
- 57) Homeri Opera II ; X III279～283
- 58) 『イリアス』 X III279～283
- 59) Homeri Opera II ; X III284～287
- 60) 『イリアス』 X III284～287